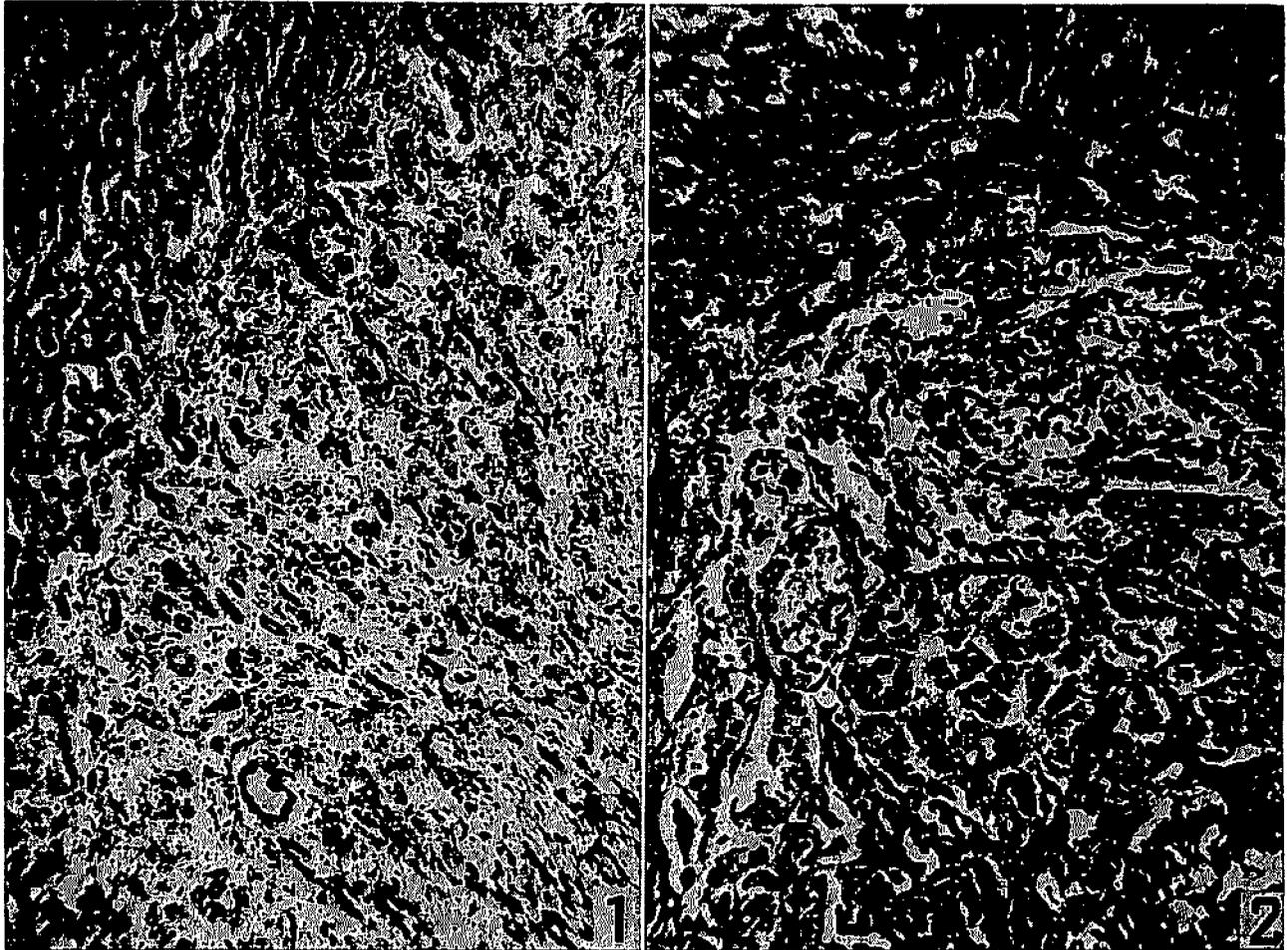


牛における肝原発性未分化癌

酪農学園大学獣医学科家畜病理学教室出題 第8回獣医病理学研修会標本 No. 107



牛，ホルスタイン種，牝，12才，江別市対雁産。1967年11月26日起立不能に陥り臨時に屠場で屠殺された。高度の瘦削を呈していた。臨床歴不明。

肉眼所見：屠殺時高度の腫大が認められた肝のみ材料提供を受けた。その他の臓器には著変認めなかつたという。肝の大きさ $68 \times 47 \times 25$ cm，重さ約 35 kg。右葉，乳頭突起および方形葉を含む肝中央部が特に腫大し，拇指頭大前後の表面に膨隆する灰白色斑の密在を伴い，包膜は緊張，硬度強，内部に粗大結節存在するを触知し得た。左葉辺縁部にも包膜の肥厚を伴う二手拳大の硬固結節を認めた。ほぼ正常膵を有するその他の肝臓部位内にも小結節が散在した。剖面において，腫瘍組織は境界鋭または不鮮明，不規則地固状，白色乃至黄白色，幼若結合織様のもので，境界鋭，類円形，黄白色乃至淡黄褐色，髓様を呈するものが大凡区別された。両者の混在または移行も観察された。左葉の腫瘍塊は結合織性で肝硬変

様像であつた。肝門淋も粗大結節状に腫大し，扁平手拳大であつた。腫瘍組織の転移が明らかであつた。

組織学的所見：肥厚した間質には胆管の増生が顕著であり，写真1のごとく腫瘍化した部位では，結合織は肉腫様に増殖し，その間に多形性の単層上皮よりなる腺胞が散在した。一部において本腫瘍組織は周囲肝組織に浸潤性発育を示した。一方写真2のごとく，多かれ少なかれ周囲に結合織性被膜を有し境界鋭な結節状に発育した腫瘍組織が見られ，細網線維の網眼に囲まれた腫瘍細胞群は類上皮様で，重層または単層索状に配列し，肝細胞癌と診断される所見であつた。

研修会においても胆管原発または肝細胞原発の見解が見られた。未分化肝臓癌において原発組織の不明なことがあるとされており，本例もそのような例に属すると考えられ，未分化の肝臓癌と診断した。